

古石場橋

橋梁形式：三径間突桁式鋼鈹桁橋
 架設年次：昭和4年3月
 所在地：江東区牡丹二丁目から
 牡丹一丁目間古石場川に架かる
 橋長：19.0m
 幅員：15.8m
 橋名由来：古石場という地名はかつて江戸幕府の石切り場があったことに由来している。



現在の様子



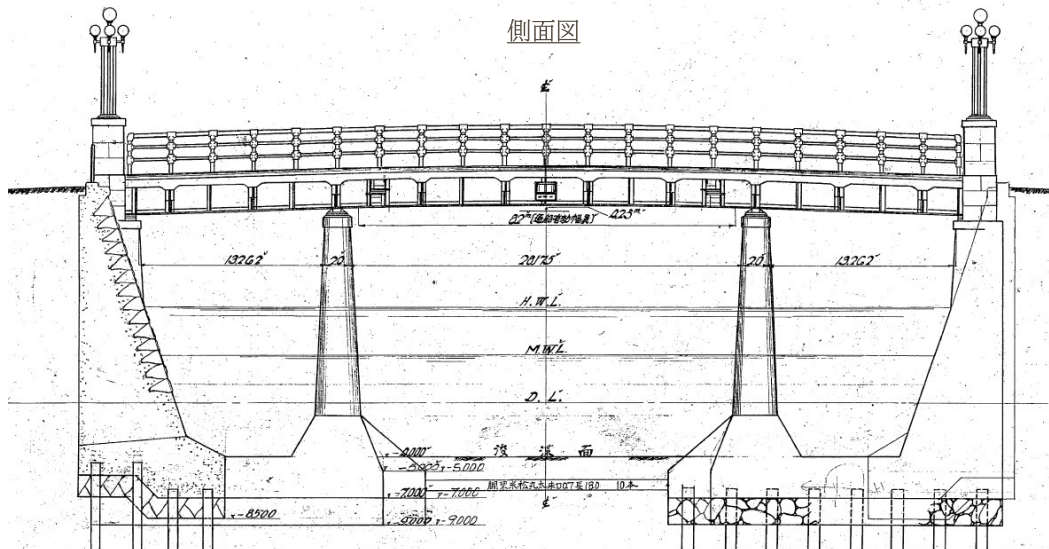
現在の様子



撮影年不明

古石場橋は、大正12年に発生した関東大震災の復興事業の一環として架けられた「震災復興橋梁」の一つです。

突桁（つきげた）とは、ゲルバー桁とも言い、連続する桁の支間部にヒンジを設けた桁のことです。ドイツのHeinrich Gerberが発案したことから、この名称で呼ばれています。



景観整備工事について

平成4年に「レトロと牡丹」をテーマに景観整備工事を実施しました。

親柱は、昭和初期に架設された当時の姿を復元しました。高欄は縦格子にし、上部は牡丹をあしらった装飾が施されています。



説明板設置工事について

令和5年に関東大震災から100年を迎えるにあたり、過去の記憶や震災復興橋梁の歴史を広く区民に継承し、防災意識の啓発を図るために震災復興橋梁の説明看板を設置しました。

震災復興橋梁について

大正12年（1923年）9月1日の午前11時58分、神奈川県西部（または相模湾北西部）を震源とするマグニチュード7.9の大地震（大正関東地震）が発生しました。

震災前、東京市の橋の大部分は木橋で、多くの橋が被害を受けました。震災直後から昭和5年（1930年）にかけて、復興事業の一環として架けられた橋梁は「震災復興橋梁」と呼ばれています。

東京市に架けられた「震災復興橋梁」の数は、8年間で約400橋で、江東区域にも多くの「震災復興橋梁」が架けられました。

一部の橋は、改修や増設を繰り返しながら、現在も都市の交通を支えています。



古石場橋の諸元

橋梁形式：三径間突桁式鋼鈹桁橋

橋長：19.0m

橋幅員：15.8m

架設年月：昭和4年3月



